

2010年度三重大学人文学部における

F D 活 動

報 告 書

2011年（平成23年）3月
三重大学人文学部

I. 2010年度FD活動の総括

人文学部のFD活動が始まったのは2003年度からであり、今年度は8年目ということになる。「FD講演会」、「カリキュラム単位の研修」、「授業アンケートの自己分析」といった用語も、すでに教員にとってなじみのあるものとなった。2010年度FD活動は、これまでのFD活動の蓄積をふまえつつ、新たな方向性への試行も意識しながら進めてきた。その概要は以下の通りである。

これまでのFD活動の中心となっていたのは、定例の研修会（あるいは講演会）である。過去3年間（2007～2009年度）についてみると、いずれの年度も、FD研修会は4回開かれている。その内訳は、カリキュラム単位（あるいは大学院専修単位）での研修会が3回、そして外部講師による講演会が1回である。今年度も、年間のFD活動計画を考えるに当たって、こうした事例を参考にして、計4回の研修会を企画した。（その後で、学生支援委員会との共催による講演会が追加されたので、それを加えれば計5回となった）今年度の特色は、最初から講演会を2回開催することとして、その分カリキュラム単位の研修会を削減した点にある。

外部講師による講演会に力を入れることとなった背景には、学部執行部からの要望があった。6月と9月に開催したFD講演会の講師は、FD委員会の人選によるものではなく、執行部の判断によるものである。つまり、6月講演会（立命館大学の沖先生）については、「教育の質保証」などが大学に強く求められているという状況と、その中で「3つのポリシー」（ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーとアドミッション・ポリシー）策定は避けて通れない課題であるということ、学部教員にも認識してほしいという執行部の意図が込められている。また、9月講演会（三重県教育委員会の岩間先生）は、高校教育の現場を理解すること、そして高校教育と大学の初年時教育との接続を図ることが重要だという脈絡で位置づけられるものであり、人文学部と三重県高校教育界との交流を今後深めていきたいという執行部が考える戦略の1つのステップとなるものである。

講演内容の詳細については、本報告書の記録を参照していただきたい。概要を述べれば、6月講演会では（演題は「教育の質保証をめざして－3つのポリシーの策定とその実現方策一」）、大学教育における質の保証と関連して、いわゆる「3つのポリシー」の策定が求められていること、それらをどのような手順で策定すればよいのか、そしてその効果をどう検証するかといった話題が提供された。これに対して、どの範囲でディプロマ・ポリシーを策定すべきなのか、その最低限の基準をどう考えるべきか等の質問があり、意見交換がなされた。

次に9月講演会では（演題は「高等学校教育改革の成果と今後の展望－三重県の取組について－」）、これまでの全国的な高等教育改革の流れについて、そして三重県におけるこれまでの取組（総合学科、多部制定時制、全日制単位制、中高一貫教育など）についての説明があり、また今後の展望が示された。この講演の後、高校教育と大学入試向けテクニック教育との関連について、また、進学校とそれ以外の高校での改革のあり方についての質問があり、意見交換がなされた。

FD委員会が担当すべきFD活動との関連でいうならば、より重要なのは、前者（6月）の講演内容であろう。私たちは通常「FD活動」という時、授業評価のアンケートを行う

こと、それをもとに授業方法を改善すること、他の教員との議論によって教育方法を学ぶことなどをイメージしているであろう。しかし、沖先生が講演の中で「カリキュラム・マップというものを使いながら、各授業の到達目標や方法や内容や成績評価基準を検証する。これが一番重要な、しかも実質的なFD活動になります」と述べているように、授業方法に関するFDからカリキュラム改善のためのFDへと、いずれ発想の転換・拡大が求められるであろう。それは、FD委員会にとってはいささか重い課題であり、今後検討されなければならない。

これら2つの講演会に加えて、10月には、「新卒採用・就職の現場で起こっていること—企業が求める人材と就職支援—」と題した講演会（中川先生）を開いた。そもそもは学生支援委員会による企画であったが、教員が学生の就職支援にどう関わったらよいかという内容でもあるから、FD委員会との共催という形態となった。その概要を述べれば、採用の現場の様子、企業の求める人材、就職活動の流れ、自己PRと志望動機のまとめ方など、多方面に渡って、具体的な事例を交えて話が進められた。その後、内定が集中する学生とそうでない学生の違いについて、また就職指導における語学教育の重要性に関する質問がだされた。

こうして、結局講演会を3回開いたため、教員にとっても消化不良という感が残ったようである。今年度の総括として実施した教員アンケートの結果をみると、確かに「講演会が多すぎた」という意見がかなり目についた。そして、「我々のニーズに合った具体的な講演が良い」「事前の講師との打ち合わせが足りないのではないか」という意見もあった。これらを踏まえて、次年度に望む必要がある。

講演会が増えた分、カリキュラム単位の定例研修会は、7月と12月の2回のみとなった。7月の研修会では、2つのテーマに関する討論を行った。第1は、前年度に実施した授業評価アンケートの結果を用いた報告と意見交換である。例年と同じように、それぞれのグループで報告者1名の説明を聞いた後、授業で用いる教材について、その有効性について、また学生の自主学習を促す方法などについて意見交換がなされた。第2のテーマは、リレー講義の改善についてである。文化学科では、地域ごとの「研究総論」について、法律経済学科では「基礎総合」について、その内容充実と改善のために討論を行い、1つの共通テーマを設定してはどうか、資料集を作成した方がよい等の提案がみられた。

そして、12月の研修会でも、カリキュラム単位で、2つのテーマに関する討論を行った。第1のテーマは、大学院教育に関するFDであり、昨年度実施された「三重の文化と社会」報告会および「修士論文発表会」を題材として、意見交換がなされた。学生にも教員にも刺激になる等の肯定的な評価が多かったが、報告会のあり方を見直すべきという意見もあった。第2のテーマは、今年度FD活動の総括であり、6月以降の研修会・講演会を踏まえて、意見交換がなされた。最後に、教員向けのアンケート調査が行われた。以上のように、2回設定した定例研修会では、全体としてみると、活発な意見交換がなされ、一定の成果が得られたとあってよい。

講演会・研修会以外のFD活動について、またそれと関連する課題についても述べておく必要がある。授業評価アンケートは、これまでと同様に、全学的に統一された様式で行った（正確に言えば、大学院生アンケートの一部には手を加えた）。問題点の1つは、今年度、アンケートの様式が大きく変更されたことである。すなわち、アンケート用紙の表面は「学びの振り返りシート」であり、裏面が「授業改善のためのアンケート」ということ

になった(巻末資料も参照のこと)。これによって、授業評価の質問項目数が大きく削減されてしまった。そして質問内容が変わった点もあるため、過去のアンケート結果との比較が極めて困難となった。そうした事情を踏まえた上で、本報告書の分析を読んでいただきたい。

授業アンケートに関わる第2の問題は、後期分アンケートより、全学的な Web アンケート回答システムが動き出したことである。つまり、これまでは、教員が紙のアンケートを配布し、学生がそのアンケートを回収していたわけだが、新システムでは、各教員が授業アンケートを紙で行うか、あるいはパソコンで回答してもらうか、選択可能となったのである。人文学部FD委員会では、検討の結果、今回(後期分)は従来通り紙のアンケートを行うこととした。それは、Web 回答にすると回収率の低下が予想されること、そして前期と後期で質の違うアンケート結果がでると分析が困難になるという理由からである。しかし、Web アンケートシステムにどう対応すべきか、どう活用すればよいかという点は、いずれFD委員会でも検討しなければならない、大きな課題である。

その他に特記すべきは、大学院生による「三重の文化と社会」報告会および「修士論文発表会」とFD活動との関連である。昨年度FD委員会は、これら発表会への教員の出席を義務とすることを検討したが、それは今年度へと持ち越された。しかし、今年度委員会では、義務化するということに肯定的な意見はあまり得られず、結局は各教員に出席を依頼するという事に落ち着いた。これもFD活動の一環であるという視点から、出席した教員へのアンケートは行ったが、これらの報告会の位置づけに関しては再考の必要がある。そして最後に、今年度は、例年行ってきた授業参観をとり止めたということがある。ここ数年間、授業参観が成り立つケースが非常に少ない(または成り立たない)という事情を考慮した上での判断であったが、今年度FD委員会では、授業参観自体が本当に必要なのか、どのように授業参観のあり方に改善を加えればよいのかという議論が十分にできなかった。これも今後の検討課題である。

以上のように、反省すべき点は多い。学部内外での変革・改革の動きに大きく影響された1年間であったともいえる。しかし、今年度の反省点は、次年度以降のFD活動改善の材料ともなるものであろう。本報告書の記録を踏まえて、また報告書内で示された学生と教員の意見を真摯に受け止めつつ、今後のFD活動の継続と充実を図っていく必要がある。

2011年3月 人文学部 FD委員長 安食和宏